

研究・調査報告書

報告書番号	担当
248	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Extreme prematurity: an alcohol-related birth effect. 超早産: アルコール関連 birth effect	
執筆者	
Sokol RJ, Janisse JJ, Louis JM, Bailey BN, Ager J, Jacobson SW, Jacobson JL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Clin Exp Res. 2007 Jun;31(6):1031-7.	
キーワード	
出生前アルコール曝露、早期産、超早産、出生前喫煙曝露、出生前薬剤曝露	
要 旨	
<p>背景:</p> <p>周産期死亡の大きな原因である早期産の割合が増えてきている。出生前アルコール曝露は早産と関連していることが知られているが、この関連については交絡要因の調整不足、統計学的検出力の不足、リスクへの曝露や在胎週数の測定の不正確さ、重症度の層別化不足により必ずしも一致した結果が見られているわけではない。そこで母の妊娠中の飲酒、コカイン、喫煙と超早産(32週以前の出産)あるいは早産(37週以前の出産)の関連を調査した。</p> <p>方法:</p> <p>3130人の妊婦に対し出産前の薬物使用に関する調査及び超音波検査を実施した。</p> <p>結果:</p> <p>アルコールとコカインは交絡要因の影響を調整後も超早産のリスクを増加させた。飲酒量1ユニットあたりのオッズ比は34.8倍であった。30歳以上の女性では飲酒曝露が早産と関連していた。コカイン使用、喫煙していても飲酒をやめれば超早産が41.4%減少していた。</p> <p>結論:</p> <p>飲酒と超早産の関連は強く、他の既知の要因と同等のリスクを持っていた。正確な在胎週数の推定と曝露の測定を行うことにより今回の成果が得られた。妊娠時の飲酒をやめさせることにより超早産児のリスクを減らしうる可能性が示唆された。</p>	